

初心者が「ピアノによる弾き歌い」を4ヶ月で2曲マスターするための助力となり得る方法の可能性について（その4）

高 橋 寛 幼児教育科

（2014年9月29日受理）

〔 要 約 〕

ピアノの学習経験に乏しい学生たちが、4ヶ月間で2曲の子どものための歌を、ピアノを使っの弾き歌いがマスターできるようになるための、有効な方法を探ってみた。授業（演習）の中で学生の人間的成長にも寄与できるその近道として、イントロダクション、脱力・呼吸・発声・リトミック、という内容を繰り返し、「自身の存在をコミュニケーションの発信機にする」必要性を理解し、そうありたいとする気持ちが醸成されてきたところを見計らって、次なる段階へ学生をいざなうことが学生たちの音楽習得に有効に作用しているとの感触をつかめた。更に、音楽の基礎知識や音楽理論の理解には、著者の解説手法（事例・実演を交えながら口演）やアプローチの方法（学生の疑問・質問に寄り添う構成）が音楽入門編（初心者向き）として確かな効果を生み、学生たちの学習意欲を増進させていることが、授業中の反応や種々のレポートなどにより明らかになってきた。

I. はじめに

日本に西洋音楽が輸入されて久しい今日ではあるが、ピアノや声楽を学ぶきっかけが「音楽をコミュニケーションの手段として使う」ことである人はそう多くはない筈だ、と音楽大学で学んだ経験上、筆者は確信するし、「使える程度にその技術を修得している」人は更に少ないということは、多くの共演者と様々なジャンルの舞台を経験してきた上で筆者は感じている。幼児教育者に相応しい「ピアノによる弾き歌い」を短期間でマスターさせることは、幼児教育者養成校にとって、子どもの表現に係る保育技術を保育との関連で修得できるようにするという観点から、必須のことであろう。本論では、筆者が短期大学という教育の現場で実践に基づき可能とし得た表記の項目について、人の成長の可能性と阿吽のチームワークの重要性を論じつつ述べたいと思う。

II. 目的・方法

必修科目である「音楽基礎A（歌）」、ともに選択科目である「こどもと音楽A（歌）」と「こどもと音楽C（歌）」の3つの教科（平成22年度までは「音楽Ⅰ（声楽）」「音楽Ⅲ（声楽）」）はともに「歌うこと」を基本にすえての音楽の基礎的な知識と技術の修得を目指すのであるが、これらを著者が1名で担当している。本研究では、学生たちが、筆者の体験してきた舞台表現のエッセンスを追体験しながら「学ぶ」「習得する」過程での人間的成長を確実に果たせるかどうかを

明らかにしていく。

以下は、過去16年間の羽陽学園短期大学幼児教育科に入学したすべての学生が保育士資格取得のための「必修科目」として履修し、体験し成果として「2曲の弾き歌い」「音楽をコミュニケーションの手段の一つとして使う」ことが可能になる過程を記したものである。ただ、入学年度によっては学生の個性が際立って異なる場合もあったので、それに応じて15回の授業のうちの複数回の実施順序を入れ替えた年度もあるが、内容としては総合的に同一である。

目的を達成するために以下の方法を用い、実践の中で、ピアノ音と自分の声との対話により「音程」の感覚と「ピアノの鍵盤の配列」を学ばせ、「テンポ」「調性」「拍子」といった音楽理論上の規則の持つ意味に気づかせようと試みた。

本論文は過去3年にわたって本学紀要に収録された『初心者が「ピアノによる弾き歌い」を4ヶ月で2曲マスターするための助力となり得る方法の可能性について』（その1）（その2）（その3）の内容の最終段階とも呼ぶべきものであり、授業としての1回目から12回目の続きの部分を提示し検証を試みたものである。

したがって、重複する実技・要点や主張が少なからずあると思われるが、割愛しないほうが論点を整理しやすい場合はそのまま重ねて記した。

（その1＝1～3回目の授業）では、主に下記の点

を論じた。(註2)

- ①音楽は、一定の規則の中でこそ美しく楽しめるものであるという点に、気づかせる。
- ②自分の耳からの情報収集においては、自身は発語せず外界からの音に集中する必要があることに気づかせる。
- ③情報の確認・保存のためには、メモやノートをとるという作業が効果的であることを学ばせる。
- ④コミュニケーションの手段としての音楽には、まず、しなやかな心身が不可欠であるということに気づかせる。

また、(その2 = 4～7回目の授業)では、主に下記の点を論じた。(註3)

- ⑤自分の特性、仲間の特性、古い時代の音楽を通しての中・高・老年世代への理解などに、思いが至るような内容であったと思われる。
- ⑥学生たちの「ピアノ・コンプレックス」の緩和への一助となりえたように、1名の教員でできる範囲の「音楽」「弾き歌い」「合唱」という内容満載の授業を展開し、学生たちがいろいろな音楽面での知識や技術とともに、コミュニケーションの手段の一つとして使える「音楽の可能性」に気づかせる。
- ⑦こどもや老人や障がいをもった人たちと触れ合いながらの仕事に就くであろう学生たちにとって、「人との繋がりを掴むスキル」のひとつとして、「音楽」を認識させる。

さらに、(その3 = 8～12回目の授業)では、主に下記の点を論じた。(註4)

- ⑧平易な旋律と和音で書かれている『こどものうた』2曲に、ピアノによる弾き歌いと基礎的な音楽理論の学習に適した編曲を施して伴奏譜を作成し、4ヶ月のうちにその「弾き歌い」をマスターできるように工夫したカリキュラムについて。
- ⑨「こどもの歌」を使つての演劇的表現法と、その保育現場での活用の可能性について学生たちに体験させ、気づかせる。

そして今回は、以下の点について記したいと思う。

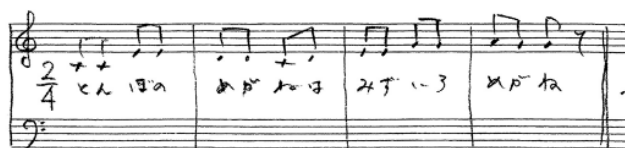
1. ピアノ・コードの簡略な解釈と奏法①、人間オーケストラ② (13回目の授業)
2. ピアノ・コードの簡略な解釈と奏法②、人間オーケストラ③ (14回目の授業)
3. 人間オーケストラ④「合同発表会」(15回目の授業)
4. 振り返りと確認のための「記述式ミニ試験」(16回目の授業)

Ⅲ. 実践

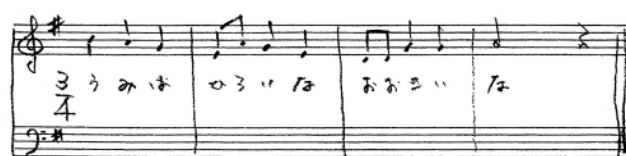
童謡や唱歌を題材にして、ピアノ・コードの簡略な解釈と奏法を学ばせる。さらに、人間の身体をつかって発信できるあらゆる音を使えば、ピアノやギターなどのいわゆる「楽器」が無くても音楽は楽しめることに気づかせ、《人間オーケストラ》という「協調性」「他者を理解しようとする目と耳と音声」が必須なジャンルに挑戦させて、より深い音楽の魅力に気づかせる。

1. ピアノ・コードの簡略な解釈と奏法①、人間オーケストラ② (13回目の授業)

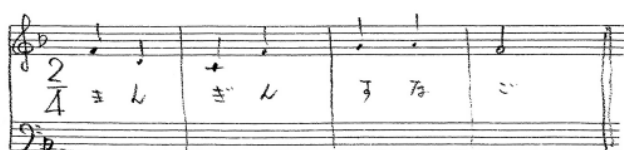
- ①子どもの歌を歌唱する際にAあまり必要とは思われないもの (i. クラシック音楽やオペラを主に歌う人のような声、ii. 過度に丁寧で説教臭い歌唱法(相手との距離感を無視した大声で、滑舌が明瞭過ぎ、原語明瞭で意味不明な硬質な発声)による演奏、iii. 正しさに満ちたご立派な態度(自身が間違いを犯す筈が無いとばかりに直立不動で胸を張り吠えるように表現する)とBできればこうでありたいと筆者が願う姿 (i. ありのままの君たちの声、ii. 語る、お話しするように歌うこと、iii. 実況中継的体験レポート風に現在進行形で)を示す。つまりABを教員が実演し分けて見せるのである。楽曲は「しゃぼん玉」(詞: 野口雨情/曲: 中山晋平)を例として使用する。
- ②教科書『こどもの歌ベストテン』の中から、「とんぼのめがね」額賀誠志 作詞/平井康三郎 作曲、「うみ」林柳波 作詞/井上武士 作曲、「たなばたさま」権藤はなよ・林柳波 作詞/下総完一 作曲、の夏の歌3曲を、それぞれ4小節だけ部分的に抜き出して印刷した資料を学生に配布する。



譜例-1

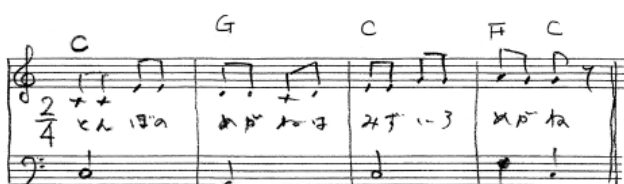


譜例-2



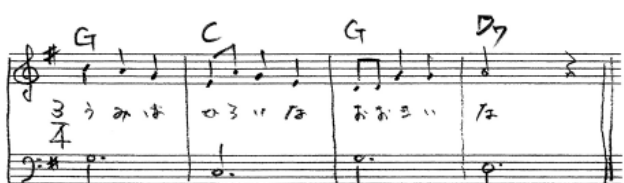
譜例-3

- ③教科書を参考にして、まず、資料「とんぼのめがね」の楽譜の上部欄外にコードネームを書き写させる。音楽の時系列がしっかりするように（つまり、2小節目の「め」の真上に「G」、4小節目の「ね」の真上に「C」を配置する）助言を与えながら、『記譜法』を簡略に説明し、その元となる基礎的な音楽理論の復習（数回前の授業の振り返り）をさせる。



譜例-1 (展開)

- ④次に「うみ」の楽譜の上部欄外にも③と同様にコードネームを書き写させる。



譜例-2 (展開)

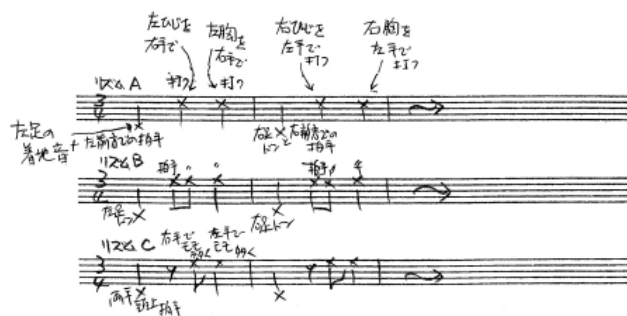
- ⑤更に「たなばたさま」の楽譜にも同様の作業をさせる。



譜例-3 (展開)

- ⑥「人間オーケストラ 身体は楽器だ！」（いかだ社）^(註1)の中から、ボディー・パーカッションの楽譜を参考にして全員で試す。楽曲は「いつも何度でも」を著者が編曲（三部合唱とボディー・

パーカッションから成る）を使用し、著者が合唱部分をピアノで演奏しつつサポートする。まずは、Iパートに1つのパーカッションのパターンでの演奏を目指してみる。ワルツ部分だけでも『歌いながら・動きながら・他のパートを聴いて見て気にしながら』という体験はなかなか新鮮で、「コミュニケーション」の基本的な要素が満載の演習が繰り返されることになる。クラスの人数を3分割して3チームを編成（各チームに全パートがバランスよく配分されるように組み分けする）し、それぞれの自主練習（15分ほど）の後に、発表し合う。その際に教員は、『うまくいっていることと、その理由』や『うまくいっていないことと、その原因』を的確に学生たちにフィード・バックしてやり、何度かの作り直しを奨励する。一定のテンポを維持すること、音程の正確さ、他のパートとの音量のバランスなど、種々の音楽的要素を満たせば、徐々に美しい合唱になってくるといふ喜びを学生たちに実感させる。



譜例-4「ボディー・パーカッションのワルツ・パターン(例)」

- ⑦パーカッションのパターンを、8小節ごとに換えていくことを提案し、学生たちに試させる。始めのうちは、なかなかうまくいかないが、コツを掴むとすぐに対応できて来る。要は、他のパートがやっているパターンに興味を持って練習すればよいだけであり、これもまた「コミュニケーション」や「社会の一員として共生することへの学びとなる演習である。この演奏形式での習熟を次回までの全員の課題とすることを伝える。
- ⑧最後に、新しい「弾き歌い」用の楽譜「アイアイ」（詞：相田祐美／曲：宇野誠一郎／編曲：高橋寛）を配布し、全員で歌う。課題ではないが、練習し発表した者には、実技ポイントを加算する旨伝える。

2. ピアノ・コードの簡略な解釈と奏法②、人間オーケストラ③（14回目の授業）

- ①『こどものうたベストテン』の中から「めだかのがっこう」を歌ったあとで、作曲家の中田喜直氏について説明し、氏の春夏秋冬の各季節の名曲を覚えておくように話す。教員が氏と何度か仕事をともにしたことのある体験談も話す。氏は前・日本童謡協会会長であり、その「めだかのがっこう」「夏の思い出」「小さい秋見つけた」「雪の降る街を」の4曲は、後世にも歌い継がれるはずの名作であり、幼児教育の世界のみならず、介護福祉施設での老人たちとのコミュニケーションの手段としても有効であろうことを、学生たちに熱く語る。
- ②『シニア世代の思い出ソング』の曲集から、歌詞が現代風に変えられてしまっている曲等を選び、全員で歌ってみる。「春の小川」（詞：高野辰之／曲：岡野貞一）には、昔のバージョンの書き込みを指示する。「さらさらいくよ」→「さらさらながる」、「さいているねと」→「さけよさけよと」、「ささやきながら」→「ささやくごとく」、など。
- ③「われは海の子」（詞：宮原晃一郎／曲：不詳）を最後まで歌ってみると、日本海軍礼賛の歌であることがわかり、「桃太郎」（文部省唱歌／曲：岡野貞一）という可愛い歌が、やはり最後まで歌ってみると戦争と侵略を肯定し大喜びする歌詞になっていることに、愕然とする学生の姿は、音楽の持つ「プロパガンダ」の一面に気がついたようである。
- ④ここで、「日常の教育に役立たせる目的」で作られた音楽を列举する。「てをあらいましょ」「はみがきの歌」「教会のミサ曲」「お寺での読経」「商品のCMソング」「校歌」「国歌」など、数えきれないほど学生たちからも例が挙げられる。教員から、『人類史上最悪の音楽の洗脳利用例』として、ヒトラーがワーグナーの交響曲をナチスのイメージアップ材料として重用したことが知られている、と付け加えておく。
- ⑤「人間オーケストラ」の『いつも何度でも』のワルツ部分の完成形を目指す。つまり、ア・カペラ3部合唱に、ボディーパーカッションのパターンを、8小節ごとに換えて加えていく、というものである。学生たちに自主練習を15分ほど課し、その後で発表してみる。教員は、いつもと同じように、『うまくいっていることと、その理由』や『うまくいっていないことと、その原因』を的確に学生たちにフィード・バックしてやり、更なる

作り直しを奨励する。

- ⑥次回の、合同発表について説明し、『ミニ筆記試験』についての概要も伝える。

3. 人間オーケストラ④「合同発表会」（15回目の授業）

- ・まず、大きめの階段仕様の教室（本学の場合は8号室）に1学年全員が集合し、まず、次の授業時に予定している『ミニ筆記試験』について、詳しい出題内容と試験時のルールを説明する。この授業の1回目からずっと行ってきたあらゆる内容が出題対象だが、そのことについての各自のメモやノート、そして楽譜や曲集までの全てを試験場への持込を認めることと、周囲の学生と相談してはならないことの2点だけは、きちんと伝える。具体的な設問については、「作家名と作品名」「ピアノによる弾き歌いの上達の方法」「音楽の基礎知識」「ピアノのコード・ネーム」などを少々挙げておく。
- ・次に、本学の講堂（入学式などにも活用する大きな空間である）に学年全員（4クラス・100名強である）が移動し（図-A）、互いの演奏を見て、聴くという体験をする。これは、クラス対抗戦のようでもあり、仲間を知る良い機会にもなる貴重な時間である。
- ・20分ほどの自主練習の時間を経て再集合し、発表の順番を決める『ジャンケン大会』を行う。勝ったクラス順に「何番目」と発表順を指定できるようにすると、この段階でまず相応な盛り上がりが見られることになる。会場内での発表の場所や観客席の配置（図-B, C, D）などは、各クラスに任せて、発表スタイルのフォーメーションとともに、全員にとって大きな楽しみであり、教員にとっては「その方法もあったか！」と驚かされるのが例年である。

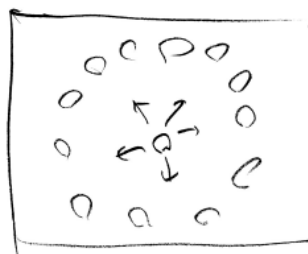


図-A：会場の配置図
（教員の説明時）



図-B：発表パターン①

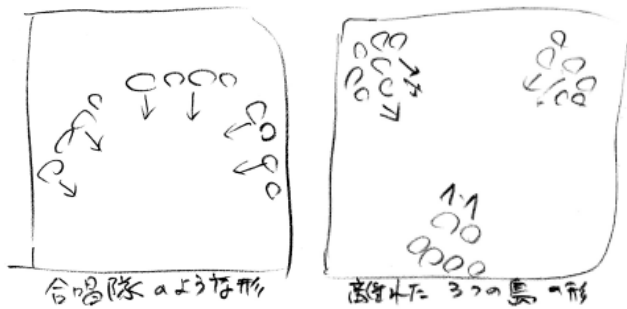


図-B発表パターン②

図-B発表パターン③

- ・お互いの発表を認め合い、楽しんだ後に、学年全員（4クラス合同）での壮大な演奏を試み、楽しむ。どの学生も、ウキウキと楽しげに歌い動き、互いの存在を認め合っている光景が、例年、見受けられる。
- ・次回のミニ筆記試験への再度の確認と励ましをして終わる。

4. ミニ筆記試験、授業の振り返り、授業評価 振り返りと確認のための「記述式ミニ試験」（16 回目の授業に相当）

- ・ある年の試験問題の一部を例として記す。
「 」内に必要な文言を埋める形式。回答は（註2）（註3）（註4）の論文にある。
- ・音楽（うた）の始まりは、主に人間の暮らしの中の2つの要因から生まれたとされている。宗教曲は万物への「 」からであり、また「 」から生まれた歌は共同作業中に仲間との連携を密にしたり、肉体的苦痛を緩和したりする効果もある。
- ・イタリア語の元来の意味を知るとは、音楽用語の理解には有効である。たとえば、「Opera」は「 」と読み、よく「歌劇」と翻訳されるが、実際は「 」とか「 」のことであり、女声の低音部を指す「Alto」が「アルト」と読み「 」を意味したり、「メゾピアノ」と呼び慣れている「MezzoPiano」の「Mezzo=メッツォ」は「 」を意味する。
- ・自分の身体を自由にコントロールできない（使いこなせない）ときに、ボディ・バランスをつかむためには、あせらずにまず順当な呼吸態を取り戻し、身体各部分の「 」の感覚を思い出すことが肝要である。
また体調を取り戻すためには「 」が有効であることを学んだ。

・「 」内に作家名を入れる形式。

作詞家+作曲家=作品名

①「 」+いずみたく=「手のひらを太陽に」
.....詩人は漫画家でもある。

②鶴見正夫+「 」=「あめふりくまのこ」
.....作曲家は日本童謡協会会長。

（以上は例である）

- ・全学で積極的に実施している「授業評価」からは以下のことが読み取れる。
- ・平成18年から21年の4年間の授業評価からは、途中で体調不良などの理由により次年度に再履修となったり、年度途中で休学や退学となったりした学生を除けば、概ね出席率も良く学習態度も積極的で、授業自体を楽しんでいるようだったことが伺える記述が多い。成績は以下である。

（5年分のまとめ）

優（80点以上）・・・24～53%

良（70点以上）・・・46～75%

可（60点以上）・・・0～8%

IV. 結果と考察

- ①コミュニケーションの手段としての音楽には、まず、しなやかな心身が不可欠であるということを再認識させることが出来たと思われる。
- ②自分の特性、仲間の特性、古い時代の音楽を通しての中・高・老年世代への理解などに、思いが至るような内容であったと思われる。
- ③「ピアノが苦手という学生」たちにも、採用試験時に自由曲（得意な弾き歌い曲）として2曲をスキルとして持たせることが出来、彼らの「ピアノ・コンプレックス」の緩和への一助となりえたように思われる。
1名の教員でできる範囲の「音楽」「弾き歌い」「合唱」という内容満載の授業の中で、学生たちがいろいろな音楽面での知識や技術とともに、コミュニケーションの手段の一つとして使える「音楽の可能性」に気づかせることが出来たように思われる。こどもや老人や障がいをもった人たちと触れ合いながらの仕事に就くであろう学生たちにとって、「人との繋がりを掴むスキル」としての「音楽」の価値を認識させることが出来たように思われる。
- ④ピアノ・コードの基礎的な知識を理解しておけば、保育の現場での新しい楽曲との出会いの際にも臨機応変に対処できることに、気づかせることが出来たと思われる。
- ⑤授業の振り返りの意味合いが濃い「ミニ筆記試験」

では、音楽の基礎知識や幼児教育に不可欠な心身のコントロール法などを、学生に繰り返し確認させることで、その重要性に気づかせることが出来たと思われる。

- ⑥入学当初多く見られた学生たちの「ピアノや弾き歌いへの怖気づく姿」は徐々に消え、「こどもの歌を幼児教育者になりきって歌う」ことへの照れも少なくなってきたことは、この授業を体験した学生達にとって、最大の効果・変化ではないだろうか考える。

- ⑦今後の課題として以下の点が見えてきた。

- ・「ピアノによる弾き歌い」の能力の個人差を拡大させないために、どの程度習熟できたかのものさしをもう少し増やし、各学生の個人レベルの変化について、時期をみて情報を掴む必要があるかも知れない。
- ・学生にとって単調な内容にならないように多くの要素を網羅した授業にしているが、もう少し焦点を絞った授業内容にしたほうが、学生の成長に寄与した部分や効果的でなかった部分がより明確になり、更なる改善へのヒントを得やすくなるかも知れない。

《註》

- (註1)「人間オーケストラ 身体は楽器だ!」, いかだ社, 2002年11月11日 *田中ふみ子氏との共著, 頁51~54
- (註2)「初心者が『ピアノによる弾き歌い』を4ヶ月で2曲マスターするための助力となりうる方法の可能性について(その1)」, 羽陽学園短期大学紀要 第9巻 (第2号)

- (註3)「初心者が『ピアノによる弾き歌い』を4ヶ月で2曲マスターするための助力となりうる方法の可能性について(その2)」, 羽陽学園短期大学紀要 第9巻 (第3号)

- (註4)「初心者が『ピアノによる弾き歌い』を4ヶ月で2曲マスターするための助力となりうる方法の可能性について(その3)」, 羽陽学園短期大学紀要 第9巻 (第4号)

《引用文献》

- 1) 池内戸友次郎 ほか:「新音楽辞典 楽語」, 音楽之友社
- 2) 近森一重:「音楽通論」, 音楽之友社
- 3) 鈴木静哉・竹内ふみ子共著:「明解・音楽用語辞典」, ドレミ音楽出版社
- 4) 野口三千三:「野口体操 からだに^きづく」, 柏樹社
- 5) 高橋寛・田中ふみ子共著:「人間オーケストラ・身体は楽器だ!」, いかだ社
- 6) 坂東貴余子編:「こどものうたベストテン」, ドレミ音楽出版社
- 7) 平野章子:「ピアノ・コードの押え方」, ドレミ音楽出版社
- 8) 坂東貴余子編:「シニア世代の思い出ソング」, ドレミ音楽出版社
- 9) 伊東一郎監修:「基本・人体解剖図」, 金園社
- 10) 近藤芳朗:「自彊術」, (株)朝日ソノラマ
- 11) 羽陽学園短期大学自己評価委員会:「自己点検・評価報告書」平成18~21年度版, 羽陽学園短期大学自己評価委員会
- 12) いわむらかずお:「14ひきのこもりうた」, 童心社

SUMMARY

Hiroshi TAKAHASHI:

The Way to Master Singing and Playing with Piano about 2 Songs for Children in Four Months for even So Many Unlearned (in a part of Music) Students (Part 4)

Where is the way to master singing and playing with piano about 2 child's songs in four months for even so many unlearned (in a part of Music) students ?

This paper aims to consider how to get this way in may lesson (in Uyo Gakuen College) of this 16 years.

(Uyo Gakuen College)